

戦後初期における入門期国語教科書の研究

—『まことさんはなこさん』を中心に—

吉田裕久

(2011年10月6日受理)

A Study on the Pre-Primer in Language of the Early Postwar Years
— In the case of “Makoto-San and Hanako-San” —

Hirohisa Yoshida

Abstract: “Makoto-San and Hanako-San” is written as a book of Japanese Language to be used at first for children entering the elementary school. Mrs. Jeidy (CIE) made suggestion for content. It was arranged in the stories which were short but continuous as to theme and characters. More repetition of words was used and fewer new words were introduced. (6 July 1948) The Ministry of Education had revised the pre-primer according to suggestion. Mrs. Jeidy approved. (26 July 1948) “Makoto-San and Hanako-San” has changed much improvement for new Pre-Primer.

Key words: Makoto-San and Hanako-San, Nobuo Ishimori, Pre-Primer, National Language Textbook, Conference Report

キーワード：まことさんはなこさん，石森延男，入門準備書，国語教科書，カンファレンス・レポート

はじめに

本稿で考察の対象として取り上げる『まことさんはなこさん』は、占領下における入門期国語教科書として編纂・発行されたものである。国語教科書史上評価の高い『こくご』（通称「みんないいこ」読本）に代わる一年生用入門準備書として、その編集・発行がGHQ/CIEによって命ぜられたものである。本書『まことさんはなこさん』については、すでに拙著『戦後初期国語教科書史研究』（2001年3月、風間書房）でも分析考察の対象として取り上げ、主として内容上の特色・意義（役割）等について、考察を試みたものである。その後、小久保美子『CIEカンファレンス・レポートが語る改革の事実—戦後国語教育の原点—』（2002年8月、東洋館出版社）や坂口京子『戦後新教育における経験主義国語教育の研究』（2009年2月、風間書房）によって、CIEのConference Reportを紹介する中で言及されたり、アメリカの入門期指導との

関連で追究されてきたりしている。

1. 本稿の課題と背景

(1) 課題

これらの先行研究を受けて、本稿では、この『まことさんはなこさん』を巡っていまだ未解決の次の3つの課題に迫ろうとする。

1つは、『まことさんはなこさん』の成立過程についてである。本書がいつから使われ始めたかは明らかになっている（昭和24年）が、この編集がいつから始まり、どのような紆余曲折を経て成立したのかということについては、必ずしも明確になっているとは言えない。しかも、この紆余曲折の成立過程こそが、戦後の入門期国語教科書の在り方、国語教育の方法を大きく方向づける決定的な大事を含んでいたのである。

2つには、1つめとも関連するが、この成立過程のどこか（たぶん要所）に位置づくものと思われる文書

㊦「昭和二十四年度 こくご一（修正原案）」を調査によって入手できたことである。この文書の位置・特色・意義などを明らかにすることである。そのことを通して、『まことさんはなこさん』の成立過程、目標・内容・方法などが明らかになるものと思われる。

3つには、その成立過程で見られる CIE の文部省への対処の仕方が、有無を言わさない絶対服従の命令レベルのものだったのか、それとも命令しながらも日本側の自己努力を促す「示唆」レベル（Suggestion）のものだったのかについて考えてみることである。

(2) 背景

以上の問題意識の背景には、次のようなことがある。

一番大きな契機になったのは、上でも触れた㊦「昭和二十四年度 こくご一（修正原案）」（以下、「修正原案」という）（写真1）の入手である。『こくご一』は、昭和22年4月から、いわゆる新教育で用いられた小学校国語教科書『こくご』（通称「みんないいこ」読本）の第一巻のことである。本教科書は、愛・民主・平和などを実現した教科書として教科書史上評価の高い教科書である。にもかかわらず、「みんないいこ」が使用開始後一年足らずで早くも修正を迫られ、『まことさんはなこさん』（これも国語教科書史上画期的な入門期教科書として戦後教科書のモデルともなった）に交代したのである。そしてこの時の状況については、この両方の教科書の編纂当事者であった石森延男によって語られている。そこで、ここで取り上げようとするこの「修正原案」は『こくご一』と『まことさんはなこさん』とを結ぶその中間形態として果たしてどの時期に位置づけるのか、そしてそれはどのような役割を果たしたのか、これらについて明らかにしておきたいという思いからである¹⁾。『まことさんはなこさん』に至る途中草稿は管見で見える限りこれ以外に残ってなくて（この草稿自体も㊦である）、本文書はその意味でも珍しく残された貴重な資料である。『こくご一』の修正原案でありながら、そしてその時点ではそこまで意識化されていたかどうか分からないが、それは必然的に『まことさんはなこさん』の成立に結びつくものであった。『こくご一』の修正過程を追えば、それは必然的に『まことさんはなこさん』に近づくことになるのである。

そして、そのことは、CIE が占領政策の一環として、日本の入門期国語教科書の編纂に対して具体的に何をしたのかということに迫ることにもなる。これについて、日本の文化に合わない、占領者の目で無理難題を押しつけたというように受けとめられている側面がある²⁾。が、その実態はどうであったのか。入門期国語教科書編纂という具体的な取り組みを通してこのこと

の一面を明らかにすることができるものと思われる。この観点からも、「修正原案」に迫っていきたい。

2. ㊦「昭和二十四年度 こくご一（修正原案）」について

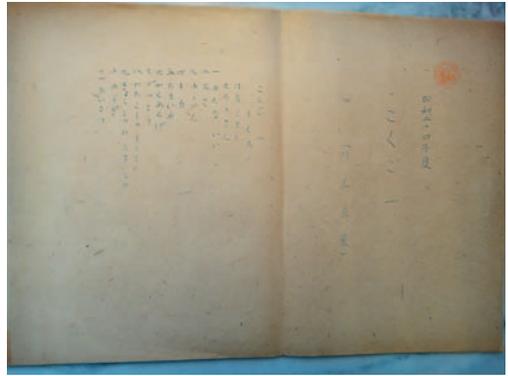


写真1

㊦「昭和二十四年度 こくご一（修正原案）」（GHQ/SCAP 文書, Box No.5633）の存在は、拙著『戦後初期国語教科書史研究』をまとめる際にも把握していたのであるが（口絵写真の一枚として掲載）、この文書に日付が記されていないことから、その分析検討の機会がなかなか持てないまま過ぎてきた。本稿において、小久保の先行研究³⁾などを参考にしながら、この執筆時期、特色、意義等について明らかにできればと考えている。本文書の体裁等は、B4版、12枚、縦書き、挿絵なし。謄写印刷。大半は平仮名表記（片仮名なし）、一部に漢字。現代仮名遣い。筆跡から、おそらく石森の手になるものと思われる。

(1) ㊦「昭和二十四年度 こくご一（修正原案）」目次

本文書（修正原案）の目次は、次のようになっている。拙著でも取り上げているが、本文書の肝心な部分であるので、ここに再掲しておきたい。

- こくご一 もくろく
はなこさん
たろうさん
- 1 みんないいこ
 - 2 あさ
 - 3 ゆうがた
 - 4 よる
 - 5 たまいれ
 - 6 かくれんぼ
 - 7 がっこう
 - 8 わたくしのもちもの
 - 9 きょうしつにあるもの

- 10 ゆうぎ
- 11 あいさつ
- 12 山のつつじ
- 13 山びこ
- 14 よみかき
- 15 こくばん
- 16 人のかお
- 17 手と足
- 18 ひとつのことばから
- 19 いろがみ
- 20 なってみたいもの
- 21 だんだんくわしくなる
- 22 お月さんのくに

この「もくろく」を一覧して直ちに気づくのは、数字表示のない教材（前半冒頭部）と数字表示のある教材（後半部）とがあることである。分量は、圧倒的に数字表示のある後半部が多い。便宜上、前半部と後半部と呼んでおく。こうして「修正原案」は、前半部と後半部との二部構成で成り立っている。

(2) 前半部

前半部は、全て新稿である。しかも、『こくご一』には見られない教材である。これらに題目はなく、ページのみ記されている。それによると教科書で8ページ分が予定されている。全て新稿なので、煩を厭わず全文を書き出してみる。そして、それぞれに簡単な気づきを添えることにする。なお漢字表記（頁）は、「修正原案」のママである。

一頁

上 花子が子犬にたべものをやっているところ
下 花子が子犬をだいてかわいがっているところ

- ・女兒が先に登場している。
- ・冒頭のページには文字が出ていない。
- ・上下二段の割り付けになっている。6・7ページを除いて基本的には上下二分割である。見開き四コマの画面構成になる。

二頁

上 子犬にちんちんさせているところ
下 花子がなわとびをして走っていく。そのあとから子犬がはしっていく。

- ・花子と犬の場面が続く。縄跳びをして走っていき、犬がその後を追うことによって画面から消えていく。ここでも、文字はまだ出てこない。

三頁

上 太郎がにわとりをよんでいる。向こうから集まってくる。

(文字) と と と と と と

下 おやどりがひよこをよんでいる。

(文字) こ こ こ こ こ こ

- ・男児、太郎の登場である。女兒は花子さんで『まことさんはなこさん』と同じだが、男児はまことさんではなく太郎さんになっている。

・『まことさんはなこさん』の冒頭部によく似た場面である。

・登場人物の男女二人（花子さん、太郎さん）がそれぞれ家にいる小動物（犬、にわとり）を相手にしている。ここも『まことさんはなこさん』では、まこさんが犬、はなこさんがにわとりを相手にしている。登場人物の名前が異なり、相手にする小動物が異なり、男女の登場順序が逆になっている。が、構造・内容は酷似の印象を受ける。

ここで(3ページになって)初めて文字が出てくる。「ととと、こここ」は、出てくる順序は逆であるが、語句自体は『まことさんはなこさん』と同じである。驚きである。早くも、ここにこうした内容・表現が出ている。偶然ではなかろう。ただ、語句・表現の繰り返しは少ない。「おいで、おいで」はない。

この2ページと3ページとおそらく見開きになって、花子さんと太郎さんと動物たちとの交流の世界が展開する。平凡な日常が描かれている。

『まことさんはなこさん』では、この後、まこさんがはなこさんを誘って学校へ出かける場面になる。が、本「修正原案」は、遊びの場面になっていて、また『こくご一』的になる。

四頁

上 太郎と花子とが紙風船をついて遊んでいる。

(文字) ひとつ ふたつ みっつ

下 太郎の写真 花子の写真

- ・数字は、『こくご一』でも割合早い段階で出ている。「4たまいれ」、11ページにおいてである。
- ・下半分は、太郎と花子の写真だけで文字はないようである。どんな学習内容が想定されるのか？

五頁

上 太郎が指さしている 鳥 牛 犬 おんどりの絵

(文字) どんなこえ

下 (文字) かあかあ もうもう わんわん こけこっこう

・太郎が指しているのは絵なのだろうか？絵本の中のあるページなのだろうか？鳴き方が話題になっている。この4ページと5ページとはおそらく見開きになる。紙風船と絵という子どもの日常世界（遊び）が描かれている。

六頁（上下通し）

花子が指さしている なのはな さくら 百合
菊の絵
なのはな さくらはな
ゆりのはな さくのはな

・5ページと内容的には続いているようである。今度は花子が花の絵を指さしている。

・おそらく絵本を見ながら、動物・花を話題にしているのだろう。動物・花は典型的ではあるが、子どもの関心に沿った教材化である。そして家庭での日常生活である。5ページと6ページは構造的には同じ場面であろう。上下二分割と上下通しになっているが、これはこのままなのだろうか？同じように上段に花子が花を指さしていて、下段に「なのはな、……」の文字になるのかもしれない。5ページと6ページとが見開きになる方が望ましいように思われる。

なお、ここでは、太郎が花子よりも先になって、男児、女児の順に返っている。

七頁（上下通し）

汽車が近づいてくるところ 太郎花子が手をあげて喜びながめている
(文字) ずん ずん おおきく なる
 ずん ずん ちかく なる

8ページも、続いて見てみよう。

八頁

上（文字） だんだん ちいさくなる だんだん
 とおくなる
下 汽車がとおく走っていく絵

7ページと8ページは、内容的に連続している。戸外での生活。汽車が近づいてきて喜び、そして汽車を見送る場面である。この場面は、『まこさんはなこさん』の後半部「きしゃ」「ばんざい」の場面に似ている。

以上、こうして「修正原案」の前半部、冒頭の8ページを見ていると、大きくは、登場人物の紹介、動物との交流、家庭での遊び、戸外の生活という構造が見て取れる。その意味では、『まこさんはなこさん』の内容のダイジェスト的ではある。部分的に、先駆け的でもある。『まこさんはなこさん』のように一日の時間的展開ではないが、二人の男女の生活（家庭内、

家庭外）が描かれている点では共通性も感じられる。

それにしても、登場人物の名前は「はなこさんたろうさん」だったのである。なぜ、そして、いつ「まこさんはなこさん」に代わったのだろうか？

ここまでは、前述したように、題目がない。あるいは、ここまでをプレプリマと見たか？しかし、8ページだけの一冊は考えられないから、やはり前半部と考えるのが自然であろう。

(3) 後半部

後半部といっても、こちらが大半を占める。全教材は、次のように22課で構成されている。『こくご一』との関連を見るために、その異同、およびその内容について示すことにする。

- 1 みんないいこ←(1「みんないいこ」と同文)
 - 2 あさ←(2「なのはな」と同文)
 - 3 ゆうがた←(9「ゆうやけこやけ」と同文)
 - 4 よる←(9「ゆうやけこやけ」の続き、同文)
 - 5 たまいれ←(4「たまいれ」、一部修正)
 - 6 かくれんぼ←(5「かくれんぼ」と同文)
 - 7 がっこう (新稿)
 - 8 わたくしのもちもの←(8「もちもの」、冒頭の一文を題目に、本文は同文)
 - 9 きょうしつにあるもの (新稿)
 - 10 ゆうぎ←(3「むすんでひらいて」と9「ゆうやけこやけ」、それぞれの一部を合併)
 - 11 あいさつ←(11「あいさつ」を一部修正)
 - 12 山のつつじ(17「山のつつじ」を一部修正)
 - 13 山びこ←(『こくご二』6「山びこ」とほぼ同文)
 - 14 よみかき←(7「よみかき」の一部修正)
 - 15 こくばん←(8「あさのこくばん」の一部修正)
 - 16 人のかお←(12「人のかお」と同文)
 - 17 手と足←(13「手と足」と同文)
 - 18 ひとつのことばから←(14「ひとつのことばから」とほぼ同文)
 - 19 いろがみ (新稿)
 - 20 なつてみたいもの ←(15「なつてみたいもの」とほぼ同文)
 - 21 だんだんくわしくなる←(16「だんだんくわしくなる」の一部修正)
 - 22 お月さんのくに←(18「お月さんのくに」と同文)
- 一見して、多くの教材が『こくご一』から継続して採録されていることが分かる。「修正」だから、現行教科書を多く引き継ぐことは自然である。文字通り部分的に修正されている教材もあるが、大半は同一内容である。そこで、教材文そのものについては煩を避けて割愛することにする。この後半部22教材をその修正の様態によって分類すると、およそ次のようになる。

- 題目を改めたもの—2あさ 3ゆうがた 4よる 8わたくしのもちもの
- 一部を削除したもの—5たまいれ
- 一部を付加したもの—12山のつつじ
- 一部を修訂したもの—11あいさつ 14よみかき 18ひとつのことばから 21なつてみたいもの
- 複数教材を合わせたもの—10ゆうぎ
- 全く同一のもの—1みんないいこ 6かくれんぼ 13山びこ 15こくばん 16人のかお 17手と足 20なつてみたいもの 22お月さんのくに
- 新稿—7がっこう 9きょうしつにあるもの 19いろがみ（新稿だけは、本文を掲げておきたい⁴⁾）

継続採録した教材にあっても、その順序の大幅な移動をどのように理解すれば良いのか。大体は順によっているように見えるが、順不同と言った方が良いような順序である。

こうして、この「修正原案」は、大きく見れば、前半部（冒頭部）を新教材、後半部は旧教材でというのが大きな特徴である。これをどう見るか。入門期用として難しいから改めるようにと言われて、その課題に答えようとした一つがこの「修正原案」（『まことさんはなこさん』的でもあり、『こくご一』的でもある）であったのである。

（4）「修正原案」提出の時期

それでは、この「修正原案」は、果たしていつ作成（提出）されたものでしょうか？この「修正原案」に残念ながら日付がないので、ここは、関連資料に基づいて推測を重ねる他はない。

①修正の指示—入門期国語教科書編集の指示—

その課題に先立って、この修正そのものがCIEから文部省に求められたのはいつなのだろうか？石森の回想（比較的の当時に近い）には、次のように昭和23年秋とある。

一年生の国語学習が、重要なものであること、この指導法を新しく研究すること、教科書を新しく編輯することを「サゼッション」されたのは、二十三年の秋である。

そこで、「こくご」（一）（二）のかわりに、第一入門書「まことさん、はるこさん」（三十二頁）第二入門書「いなかのいちにち」（七十三頁）第一読本「いさむさんのうち」（一三七頁）ができあがった⁵⁾。

昭和23年秋と明記されているが、これではいかにも遅すぎる。昭和24年4月の使用開始のためには、この時期にはもはやできあがっていなければならない。

もう一つ、このことに触れてよく引用されるのが、「占領下のころ」である。ここには時期は明示されていないが、経緯が次のように紹介されている。

国語教科書の正本が、ともかくもできあがったのはいいが、そのあとにすぐ指導者として招かれて来朝したストリックランドさんに、どうもむりなところがあるといわれてしまった。とくに、小学校一年用のものについて、こんこんと注意され指導された。いわれたけれども、わたしにはどうも合点がない⁶⁾。

となると、昭和22年度使用の国定国語教科書の編纂が一区切りついたころ、22年度の後半から23年度の前半にかけてというのが自然であろう。

②Conference Report

ここからはもう一方の当事者であるCIE側の文書を見ることにする。CIEでは、会議ごとにその報告が上司に提出されている。会議報告（Conference Report）である。この『まことさんはなこさん』の成立過程と関連がありそうな報告をピックアップすることにす。なお翻訳については、小久保の先行研究⁷⁾を参考にす。

1948年3月9日：「初級学年の国語教科書」

最初の石森・ストリックランド会談は、昭和23年3月9日に、小学校段階の国語教科書の在り方をめぐって持たれている。

話しあいは、読むことの指導、および第1学年の現在の国語教科書を読む際に低学年の子どもたちの課題となっている眼精疲労（原文：eyestrain）が中心であった。（中略）眼精疲労を減少させる入門期児童の指導方法を探求した。低学年の資料の量を増やす必要があり、数年間でこれを達成させる方法が示唆された。子どもたちをグループに分け、それぞれのグループが別々の本を持つようにすれば、全員が本を交換して読み合うことができるので、これ以上親に金銭的負担をかけないですむし、また、一人一人の子どもにより多くの読みの資料を与えることができる。次には、この目的で使用するのことができる追加読本や価値を調整した教科書が刊行されるであろう⁸⁾。

さしずめこれから展開する前哨戦といったところか。次の3月12日の会議には、猪俣、篠原、小山も加わって補充読本（原文 Supplementary books）について話し合われたが、計画は認可されなかったようである。

1948年4月16日：「国語教科書」

第一学年のプレ・ブリマの概略が、検討のために提出された。それは入門期児童のための早期資料に関して大きな改善を示している。しかし、それと現在の第1学年の教科書資料との間にはほとんど何の関係もなかった。かなりおもしろいことに、第1学

年および第2学年における読みの必要条件(reading requirement)の問題について、まったく理解していないように思われる。

委員会は、話しあいの観点にそって書き直すために、用意してきた資料を返された⁹⁾。

ここに、第一学年のプレ・プリマの素描(原文 sketch)が一案として提出されたようである。しかし、ストリックランドは、ずいぶん改善されてきているとは認めながら、第一学年の読みの必要条件が理解されていないとしてその資料を返却している。どんな素描を持ち込んだのだろうか?この時、低学年の読みの必要条件とはどのようなことが考えられていたのか。ともかくこの日の素描は持ち返らされている。一方、「修正原案」はかなり具体的な教材文まで示されているので、この「素描」には該当しないであろう。

1948年5月5日:「第一学年の国語教科書」

石森氏は、第1学年の読むことにおける入門期の学習について、旧い教科書をほんの少し書き直しただけのものを提出した。CI & Eの代表者たちは、現在のものがまったく満足のいかないものであるから、初めての資料をもってきたとばかり考えていた。石森氏は、現在の計画を完全に修正してものごとを遂行しようとはまったく考えていない。なぜなら、彼は自分の本(教科書)が再版されることを望んでいるからであり、教科書局が解散される8月までに、再版の準備をしたいと望んでいるからである。(中略)石森氏は、よその国での研究の結論の線にそって資料を編むことに反対のようにみえる¹⁰⁾。

『こくご一』を大きく引き継いだ(とりわけ後半部)ように見える「修正原案」は、この報告と考えられなくもない。が、「修正原案」がここに言う「旧い教科書をほんの少し書き直しただけのもの」(原文は a slight revision of the old textbooks)と言えるかどうか。少なくとも、冒頭の8ページ分は、完璧に新教材である。この部分をどう解釈するか。この8ページ分の新教材の存在は大きい。と考えると、「修正原案」は、この時期よりももう少し後のように思える。

なお、このストリックランドの発言「(自分の本の)再版の準備をしたいと望んでいる」「よその国での研究の結論の線にそって資料を編むことに反対のようにみえる」は手厳しい。かなり踏み込んだ、核心に迫る、本音の話し合いが展開されたようである。石森の回想の中によく現れる「なにを苦しんでアメリカ風の編集を鵜のみするすることもあるまい」¹¹⁾という箇所と呼応しているように思われる。この文字法と語形法とを巡って石森とストリックランドとの間ではかなりの確執が生じたようである。石森にとって忘れられない苦

吟の思い出として何度も語っているところである¹²⁾。

が、本稿の関心は、直接的にはこの部分ではない。

1948年7月6日:「新しいプレープリマ」(写真2)

ここから直接の担当がストリックランドからヤイディに代わっている。検討の対象も、ストリックランドのファイルからヤイディのファイルに代わる。

新しいプレープリマは、ちょうど下書きが終わったところであるが、教育課の認可を求めて、文部省の代表者たちによって提出された。

一目見ただけで、本官はその内容に失望させられた。入門期の読みの内容と指導の手順に関して、委員会とともにながりの時間と努力を費やしてきたからである。このプレープリマの構成は改善されているようにも思えるが、全体的な構成は、旧いものと同じであった。本の中に完全な文はほんのわずかしかなかった。多くの時間が、道徳的な事柄と自然に関する美について話しあうことに関係している。読みの経験は、ほとんど本の中に示されていない。

要約:文部省の代表者たちは、教育課の認可を求めて、新しいプレープリマの草稿を提出した。新しいプレープリマは、旧いプリマからの改善があまりみられなかった。修正に関する示唆が与えられた¹³⁾。

「下書きが終わったところ」「内容に失望させられた」「入門期の読みの内容と指導の手順に関して、委員会とともにながりの時間と努力を費やしてきた(その話し合いが生かされていない)」「多くの時間が、道徳的な事柄と自然に関する美について話しあうことに関係している」「新しいプレープリマの草稿を提出」——この提出された「新しいプレープリマの草稿」が「修正原案」に当たるのかどうか。かなり近いようにも思われる。が、「構成は改善されているようにも思えるが、全体的な構成は、旧いものと同じ」とはどういうことか?結果的には、内容的には旧態依然というのであろう。次の7月12日の会議とも関連するので、先に進め

写真2

ることとする。

1948年7月12日：「先週提出されたプレーブリマ」

本官は、提出されたプレーブリマを認可しなかった。なされてきたところの描写に基づいて、内容に対する示唆を与えた。短くても、テーマと登場人物とが一貫している物語で内容を構成すること。語句をもっと繰り返して用い、新語はわずかしか導入しないこと。紳士たちは、示唆を賛同して受け止めたように思えた。そして、修正するために草稿は持ち去った。彼らは、本官が定例会議の前に資料を読み評価する機会が持てるよう、来週になる前にそれを戻すとのことであった¹⁴⁾。

結論から言うならば、この「先週（引用者注：7月6日）提出されたプレーブリマ」「持ち去った、来週になる前に戻す」草稿が、「修正原案」に当たるのではないか。そして、こうして結果的にヤイディに「戻した」からこそ、幸運にも「修正原案」がCIEに保存されることになったのである。

ここで、今一度「修正原案」に立ち返ってみよう。
・「テーマと登場人物とが一貫した物語で内容を構成する」—これに対して「修正原案」はしていない。とりわけ後半部は従来型で、様々な文章が入っている。
・「語句をもっと繰り返して用い」る—これまた「修正原案」は、意図的に繰り返してはいない。

こうしてこの時のヤイディの批判にぴったり当てはまるのが、この「修正原案」なのである。おまけに、
・「草稿を持ち去った」—「修正原案」は手書きで、謄写版印刷したもので、まさに草稿そのものである。ということから、この「修正原案」こそが、この時（7月6日提出）の草稿に該当すると思われる。

以上で、「修正原案」を確定する追求は一段落ついたことになる。このヤイディの不認可を受けて石森を初めとする文部省は、この具体的な示唆に基づいて「修正原案」を改めて変更することを余儀なくされた。そして、その改訂版が次の会議で提出されることになる。

1948年7月26日：「国語のプレーブリマ」

7月12日の具体的な示唆に基づいて、プレーブリマの草稿が、再提出されている。

文部省の紳士たちは、先週与えた示唆にしたがって、プレーブリマを再検討した。今度の内容は、400ちよっとの語数で、新語は65語だけであった。絵は、動きがあり、カラーだった。読みやすくておもしろく、子どもらしいものであった。本官は、第1学年の読本は難しすぎると過去に不満をもらしていた教師たちも、（吉田補充：使用に適用していると喜ぶであろう）と、現在感じている¹⁵⁾。

こうして7月26日時点で、『まことさんはなこさん』

の草稿が認可されたものと認めることができよう。思えば、4ヶ月あまりの攻防の結果である。

実際の『まことさんはなこさん』は、

- ・テーマと登場人物とが一貫している物語—まことさんとのはなこさんによる一日の生活、
- ・語句を繰り返して用いる—十分すぎるくらいに対応、
- ・新語はわずか—68語

つまり、要求された条件に極めて近いことが分かる。

となると、以上の経緯から、「修正原案」は、当初、5月5日（旧い教科書をほんの少し手直したものの）か、7月6日（旧いブリマからの改善があまり見られない草稿）か、そのどちらかが該当するのではないかと考えられたのであるが、前述したように、7月6日の文書だとするのが妥当なようである。

「修正原案」を7月6日提出草稿（7月12日不認可）だとすれば、却下から約2週間という短時間で『まことさんはなこさん』（32頁）を仕上げたことになる。『こくごー』の部分（後半部22課）を放棄し、冒頭の8ページ、「はなこさんたろうさん」を「テーマと登場人物が一貫する物語として構成」「語句を繰り返して用い、新語をわずかに」して、「まことさんはなこさんの物語」として、編纂し直したのである。

こうした検討の結果、最終的に、この「修正原案」は7月6日に提出し、7月12日に却下された草稿であると判断するものである。つまり、この「修正原案」は、『こくごー』と『まことさんはなこさん』とをつなぐ中間形態であったのである。

こうして「修正原案」の位置等を確定した段階で、いくつか疑問も残っている。

一つには、「修正原案」の教材数（22課）の多さである。なかには、「お月さまのくに」のような長文教材も収録されている。とてもプレ・ブリマとしては、あるいは一年生前期用としても、量的に多いように思われる。そう考えると、「修正原案」はどのレベルだったのだろうか。本当に一年生前期用だったのだろうか？『こくごー』という書名から見れば、そうとしか理解できないのだが。

また一つには、教材の大半が『こくごー』からの継続で、それは『こくごー』の修正なので自然なのだが、一教材（12 山びこ）だけが『こくご二』から採録されている。これはなぜなのだろうか？

さらに一つは、この「テーマと登場人物とが一貫した物語で内容を構成する」「語句をもっと繰り返して用いる」という際に参考になったのは何かという問いである。結論からすれば、それは、やはりアメリカの読本であったであろう。

石森に、次の回想がある。

ヤイデーさんは、(中略)、「ことば」は経験することによってのみ育つものだというのだ。獲得したひとつの貴重な語彙をいっぱい働かせ、順々に積み重ね、単純な表現より複雑な表現へと向上させるべきであるといった。それには、語彙の頻度数が重要な条件だといひ、文の反復が、大切な理解の契機になると説いた¹⁶⁾。

これが「こここ、ととと」につながったものと思われる。そして、この言語経験主義に基づく言葉の指導の在り方は、学習指導要領のとらえ方そのものであった。こうして『まことさんはなこさん』他(いなかのいちにち、いさむさんのうち)の入門期国語教科書は、発行されたばかり(昭和22年12月)の『学習指導要領国語編(試案)』、平行して検討中であった「国語教科書の評価規準」などと照らし合わせながら、編纂作業が進められていったのである。

(5) なぜ、二人の児童、一日の生活だったのか？

それでは、この「テーマと登場人物で一貫した物語」で内容を構成するというその具体化が、なぜ「二人の児童が織りなす一日の生活」(テーマ)だったのか。

①ヤイディ等の示唆

こうした入門期国語教科書の発想は、日本の過去の国語教科書には存在しない。ここはやはり、この時代、アメリカの国語教科書にヒントを得たとしか考えようがない。その辺りを探ってみよう。石森の回想に戻してみる。

わたしは、アメリカの国語教科書を知りたいというと、ヤイデーさんは、さっそく本国からとりよせて、どきとわたしにくれてよこした。次に掲げるものは、そのほんの一部である(後略)¹⁷⁾。

こうして挙げられた教科書の中で注目すべきは、その多くが、Paul and Betty, Jack and Sue, Mac and Muff, Top and Tip など男女二人の登場人物、そしてその活動場所は School, Home, Farm など身近な場所、話題も Play, Adventure など子どもらしい活動的なものとなっている。どの教科書が直接参考になったのかは分からないが、おそらくこうした中から、「二人の児童、一日の生活」が選ばれたのではないかとと思われる。

石森は、用意されたアメリカの言語教科書を、

片っぴしからむさぼり読んだ。読んでいるうちに、ヤイディさんの示唆してくれたことが、なるほどとうなずかれてきた。

新語彙提出に対する編纂者の神経の細かさ、いささか驚いた。いかなる語彙をとりあげるかの用心深さにも心うたれた。しかも子どもたちの喜びそうな、おもしろがりそうなドラマプレーに取材した巧みさ

に啓発された。なかなかの練達である。

そこで、わたしは、新しく「プレ・プリマ」を編集しなければならないことを悟り、つづいて「プリマー」を編集することにきめて、それにとりかかった。それが、「まことさんはなこさん」である¹⁸⁾。

納得の瞬間である。ものごとの価値・意義に目覚めた瞬間である。石森は、この時、入門期国語教科書の在り方、そしてそれに合わせて国語教育の方法(=単元学習)を納得を伴って理解したと思われる。この状況を「悟り」とも表現している。さらに「敗戦によって与えられた思いがけない国語教育の知恵」¹⁹⁾とも表現している。

②アメリカの言語教科書の示唆

折しも、くだんのアメリカの教科書について、『アメリカ教科書の研究』が発刊されている。これによれば、アメリカの言語教科書は、次のようにその特色が紹介されている。

教科書の構成はほとんど例外なく、一対の少年と少女とを中心として、その具体的日常生活が物語風に興味深く記述されているが、その内容は、児童に最も手近かな家庭生活から初めて、社会人として公民としての人間的教養の修得が極めて懇切に企画されており、言語の教育はむしろ従たるの観さえある。今一例を Stoddard, Railely, Lewis 三氏共編になる American Book Company の English One (Grade 3) に採つてみると、先ず全篇を一貫して、中心となる少年少女とは Jane と John との兄妹である。物語はこの二人の少年と少女とが、その祖父からインディアンの物語を聞く所から出発して、やがてこの物語を教室で級友に紹介し、次いで級友と共にこの物語を劇に演じなどしながら、二人の生活が家庭生活から学校生活へと展開し、さらに学友間の交際から社会的な生活へと、次第に生活空間を拡大して行くと共に、漸次社会人としての Good Manner を修得し常識を蓄積して行くのである。このように子どもの日常生活を中心に教科書が構成されているために、その内容は一貫して統一があり発展がある²⁰⁾。

- ・一対の少年と少女とを中心
- ・具体的日常生活を物語風に興味深く記述
- ・家庭生活から始める

これらは、まさに『まことさんはなこさん』の世界そのものである。ひな型通りといっても良いくらいである。この編纂法に基づく日本版の実現である。

一対の少年と少女がまことさん・はなこさんであり、起床から学校生活を経て就寝に至る一日の出来事が物語風に描かれている。モデル通りである。1ペー

ジあたりの新語をセーブし、語句・表現を繰り返す。これまたひな型通りである。こうしたイメージで入門期国語教科書を示唆してきたヤイディであるから、『まことさんはなこさん』を覆すはずがない。

こうしてまことさんはなこさんという二人の児童を中心に、一日の生活を物語風に展開した『まことさんはなこさん』が誕生したのである。

3. CIEの指示は、「命令」か？ 「示唆」か？

3つめの課題であるが、これまでの検討でほぼこの課題に対する解答は出てきているようにも思われる。が、占領期という時代背景から何でも絶対命令と考える向きもあって、「命令—服従」のように捉えてしまうところがある。現実には、それに近い状況もあったかもしれない。しかし、この入門期国語教科書の課題に関する限り、必ずしもそうではなかった。もちろん侃々諤々の議論はあった。「石森氏は、現在の計画を完全に修正してものごとを遂行しようとはまったく考えていない。(中略)石森氏は、よその国での研究の結論にそって資料を編むことに反対のようにみえる²¹⁾。とか、「石森は、こちらの言うことが理解できないようだ」と言われる。わたしは、これをしおに辞職しようと思った。なにを苦しんでまでアメリカ風の編集を鵜のみすることもあるまい。」²²⁾ などという険悪な一幕もあったらしい。が、ここは学問的、研究的な対立であり、人間的対立ではなかった。石森は、「単元は探幻」²³⁾とよく分からない新規の方法と当初は捉えながら、ここで納得して言語教育、国語教育の方法として、その有効性を自得したのである。つまり、この『まことさんはなこさん』の編纂は、国語学習の新しい側面を発見する機会につながったのである。それは、大げさな言い方をすれば、戦後における日本の国語学習の新生に向けての出発にもなった。言語の経験を与えることが言葉の力を高めることになるというCIEの提案に『まことさんはなこさん』を日米共同で合作することを通して理解したのであった。この後、石森は進んで国語教育における単元学習を説くことになったのである²⁴⁾。

ということで、この時のCIEの命令は絶対命令、有無を言わさぬそれと言うよりも、これまで経験がない故に理解しがたい方法ではあるが、真に有効な方法として「示唆」(助言)したのものと受けとめるのが妥当であると思われる。

おわりに—まとめて代えて—

以上、GHQ/SCAP文書の中に、㊟「昭和二十四年度 こくご一 (修正原案)」という文書(教材集)を見いだしたことに端を発し、この位置・意義を明らかにしたいということから取り組んだのが本稿である。

結局、本「修正原案」は、『こくご一』の修正版として、『まことさんはなこさん』へ移りゆくその中間段階に位置し、その冒頭部分の8ページは『まことさんはなこさん』を生み出す直接の契機として機能した。そして、『まことさんはなこさん』は、その後の国語入門教科書のモデルになった。その意味では、ストリックランド、ヤイディの示唆は、直接の担当者であった石森に止まらず、その後の日本の国語教育に大きな影響を与えることになったのである。実に大きな「示唆」であったと言える。

【注】

- 1) 拙著『戦後初期国語教科書史研究』でも取り上げているが、ここでは「紹介」レベルにとどまり、その成立過程等については不問の状況であった。本稿は、Conference Reportなど、周辺の資料を交えながら、その位置・特色・意義などを分析・考察しようとするものである。
- 2) 坂口は、その時の当事者の一人であった猪俣辰弥の著作『入門期の国語教育』に触れながら、「現在の入門期指導がアメリカの直輸入であり、日本において吟味されたものではないということである」と述べている。(『戦後新教育における経験主義国語教育の研究』, 128ページ)
- 3) 小久保美子『CIEカンファレンス・リポートが語る改革の事実—戦後国語教育の原点—戦後国語教育の原点—』(2002年8月, 東洋館出版社)
- 4) 新教材は以下の3教材である。

7 がっこう

がっこうはすき、がったんしいそうがあるからすき。
べんきょうをするからすき
うんていがあるからすき。
がっこうはだいすき。
うんていをやってぶつけれどなかないよ。
ちがでたときなかないよ。
ずがをやるからすき。
ろうかがひろいからすき。
おともだちがおおぜいいるからすき。
せんせいにほんをみせてもらうからすき。
それからおはなしがすき。
こうさくがすき。
いとうすきはゆうぎ。

やすえさんが ゆうぎ じょうずだから

わたしは いつでも まねてする。

*学校が話題になっている。生活の観点からか？

9 きょうしつにあるもの

こくばん こくばんふき はくぼく つくえ こし

かけ ほんだな おるがん

*これも学校が話題である。教室、持ち物、「身近」(学校)が共通点である。

19 いろいろがみ

おみやげに もらった いろいろがみ。きれいなはなの
ついている いろいろがみ。

大きな いろいろがみ、あした がっこうへ もって
いって みんなと あそぼう。 なにを つくろう
かな。 こくごの ほんに はさんだら、こくごの
本までに いいきもちだ。いろいろがみのとこ よく
おさえて、こくごの本 大きな こえて よむと、
いい きもちだ。

*長短様々。難易度がよくわからない。

5) 「国語教育の回顧と展望三」, 『国語教育講座 国語教育問題史』昭和26年7月10日, 刀江書院, 100~101ページ

6) 「占領下のころ」, 「言語生活」第164号, 昭和40年5月, 筑摩書房, 53ページ

7) 3に同じ

8) 3に同じ, 112ページ

9) 3に同じ, 118~119ページ

10) 3に同じ, 130ページ

11) 6に同じ, 55ページ

12) 「語形法と文字法」は、今日においても重要な言葉の指導法である。アルファベットの場合、これが必ず大きな問題になる。シラブルの学習無くして言葉の学習はできない。発音と文字とが一致しない場合が多いからである。ところが日本の仮名の場合、むしろ例外を除いて、発音=文字である。従って、一年生の子どもでも発音できればそれを仮名表記できる。日本の子どもが小学校の低学年から作文を書けるといわれるゆえんである。ところがアルファベットの場合、[si:]と発音しても、それが“see”なのか“sea”なのか、区別ができない。日本語で言えば、発音通りでない助詞の「は・へ・を」と問題状況は似ている。ここがポイントだと思われる。その意味では旧くて新しい問題である。こうした文字学習に先立つシラブル学習については、幸いなるかな、日本語では避けられている。これは文化の対立ではない。言語の特色の問題である。四季がある国とそうでない国とで過ごし方が違うのと同じである。語レベルでないと学習が始められない言語と文字レベルで学習が始められる言語との相違である。入門期は、ここの違いが著しいのである。

13) 3に同じ, 162ページ

14) 3に同じ, 163ページ

15) 3に同じ, 164ページ

16) 「敗戦直後の国語教育」, 「現代教育科学」99号, 明治図書, 221ページ

17) 16に同じ, 221ページ

18) 16に同じ, 223ページ

19) 16に同じ, 223ページ

20) 石山脩平編『アメリカ教科書の研究』, 昭和23年11月20日, 金子書房, 61~62ページ)

21) 3に同じ, 130ページ

22) 6に同じ, 55ページ

23) 5に同じ, 97ページ

24) 当初, 紹介された単元学習を不可解とも捉えていた石森だが、この有効性を自覚するや、晩年までそれを支持していた。

この『まことさんはなこさん』の編纂は石森の個人史にとっても大きな出来事であったが、この時の指導者である石森を通して日本の国語教育の歴史にとっても一つのエポックメーカーな出来事になったのである。しかし活動・経験を通して言葉の力を育成する、教えるよりは学ぶことによって言葉の力を付けるというこの言わば間接的な指導法は、知識・技能を練習的に与えるという言わば直接的な指導法に比べて高い教育技術が要求される。一段と高度の教師の力を必要とするのである。そして、このことはこの時の出来事だけではなく、今日的な課題・問題でもある。言語活動を通して言葉の力を育成しようとしたり、言語活動を通して思考力・判断力・表現力等を育成するという今日的課題、そしてこの実現に向けてその具体化の分からなさ、実現の困難さは、この時の課題に共通している。その意味において、言葉の学習における経験・活動を通して学ぶというこの時の巡り会いは、その後続く一つの大事な問題提起であるとともに普遍的な課題の幕開けでもあったのである。

【補 訂】

この『まことさんはなこさん』に関わって、拙著『戦後初期国語教科書史研究』において、その使用時期を誤って理解していた。ここに、お詫びと訂正をおきたい。

『こくご一』と『まことさんはなこさん』の使用年度について、正しくは次の通りである。

昭和22年度——こくご一・こくご二

昭和23年度——こくご一・こくご二

昭和24年度——まことさんはなこさん, こくご一・こくご二

昭和25年度——まことさんはなこさん, いなかのいちにち, いさむさんのうち